

卒業論文

猫のいる町・尾道の提供する癒し
—癒しを目的とした旅行との比較を通して

大沼あゆみ研究会 10 期

大藪 梓

勇氣とは、窮地に陥ったときに見せる気品のことである。

アーネスト・ヘミングウェイ

目次

序論

第1章 日本の猫を取り巻く現状

1.1 ペットとしての猫

1.2 猫に関するトラブル

1.3 猫と触れ合いたい人々

第2章 問題意識

2.1 猫に価値はあるか

2.2 猫が人間に与える癒し

2.3 比較対象

第3章 癒しを目的とする旅

3.1 温泉地

3.2 避暑地

3.3 神社仏閣

3.4 ローカル線

3.5 小括

第4章 「猫のいる町」への旅

4.1 3つの要素からの評価

4.2 一般化

4.3 問題点

第5章 結論

参考文献

あとがき

序章

「猫」と一口に言っても、人によってイメージするものは違うだろう。猫が好きな人であれば、柔らかな毛並みやのんびりと眠る姿を思い出すだろうか。対して、猫に自宅の庭を踏み荒らされたことを思い出す人や猫カフェに行こう、と誘われたことを思い出す人もいるかもしれない。

このように猫は、人に様々な印象を与える。それは現代の日本における猫が大きく二つの顔を持っているからであろう。一つはペットとして、かわいらしい動物としての顔、もう一つは都市・住宅問題の原因となる困り者の顔である。多くの人がこういった印象を持つにも関わらず、猫に関するトラブルに対処するとき、人は「猫がいると迷惑である」とことと「猫は罪なき命であり尊い」ことを天秤にかけることがほとんどである。当然、猫の命は尊ばれるべきであるし、近年の動物愛護的意識の高まりが反映されてのことであろう。しかし、猫のかわいらしさ、つまり私たちが猫を見て心を和ませるといふ「癒し」の要素はこうしたトラブルへの対処という場であまりにも無視されてはいないだろうか。自分の庭が荒らされているのに悠長な、という人もいるだろう。しかし、地域で猫を管理する取り組み「地域猫活動」を通して猫と共存していこうとする地域や、猫の話題性を利用している地域があることも確かである。

本論文では、「猫のいる町」として広島県尾道市をモデルケースとし、癒しを目的とする旅行との比較を通して、尾道が人々にどのような癒しを与える可能性を持ち、そのためにどのような課題を持つのかを明らかにしていく。また、「動物のいる町の風景」とより一般化した形についても論じ、それが成り立つための条件について考えていく。

第1章 日本の猫を取り巻く現状

まず、現代の日本における猫に関する問題、動き等について概観する。

1.1 ペットとしての猫

猫は犬について人気のあるペットである。ペットフード協会による調査¹によれば、全国の推定飼育頭数は9,748千頭、飼育世帯率にして10.8%であるという。調査結果に「外猫」、いわゆる野良猫は含まれないとされるため、実際に国内で暮らす猫はより多いと考えられる。経年変化で見ると、2010年以降2013年までに大きな変化は見られず、9,600千頭から9,700千頭前後と推定されている。加えて同統計によれば、20代・30代の飼育率(9.1%、8.2%)に対して40代から60代での飼育率がいずれも10%を超えることから高齢層でのペットのニーズの強さがみられる。猫の平均寿命は長寿化の傾向にあり、14.5歳とされた。しかしながら家の外に出る猫と出ない猫で3.4年と大きな差が見られる。これは飼い主が餌やりや予防接種等のケアを同様に行ったとしても、屋外には病気の感染リスクや事故に合う危険性があるためであろう。また、犬と比して特徴的な点としては、飼育される犬の純潔種の割合が80%ほどであるのに対して、猫の純潔種の割合は15%程度に留まることである。純潔種のペットの入手経路はペットショップ等が中心であるが、雑種のペットは里親として譲渡されたもの、または拾ったものであると考えられる。いわゆる「捨て猫」「野良猫」の問題については次項で詳細を述べる。

近年では「ペットは家族」という感覚が一般的になってきた一方で、虐待行為をはじめとする不適切な取り扱い、周辺への迷惑などが問題視されている。このような状況を受けて、平成24年9月に動物の愛護及び管理に関する法律の一部を改正する法律（改正動物愛護管理法）が公布され、平成25年9月1日より施行

¹ 一般社団法人ペットフード協会,全国犬猫飼育実態調査
<http://www.petfood.or.jp/data/index.html>

された。一般の飼い主においては「終生飼養」、動物が命を終えるまで適切に飼養することの義務化、それに伴う都道府県等による引き取り拒否が認められたことが大きい。動物取扱業者に関しては本論での議論の対象とはしないため、参考とするが、動物の福祉を目的としていることがこちらでも見てとれる。

参考：改正動物愛護法の主なポイント(動物取扱業に関するもの)

- ・ 責務としての販売が困難になった動物の終生飼養の確保
- ・ 犬及び猫を販売する第一種動物取扱業者は、犬猫等健康安全計画の策定、個体ごとの帳簿の作成・管理、毎年1回の所有状況報告が義務付けられた。
- ・ 哺乳類、鳥類、爬虫類の販売を業として営む者は、販売に際してあらかじめ、購入者に対して現物確認・対面説明をすることが義務付けられた。
- ・ 幼齢の犬猫の販売制限

出典：環境省「動物の愛護及び管理に関する法律が改正されました<動物取扱業者編>」²

現代の日本は「ペットは家族」という個人の感覚と、「動物の福祉」という社会に共通の概念がともに育ってきた社会といえるだろう。

1.2 猫に関するトラブル

猫の大きな特徴として、犬のように繋がれずに自由に町を歩くという点がある。そういった猫は二種類に大別される。暮らす家があり、夜はそこに帰る猫と完全に外で暮らす猫である。どちらの場合でも、とりわけ住宅密集地においてはトラブルの原因となりうる。特に、飼い主がいる場合には猫によって被害を受けた人

²環境省自然環境局、動物の愛護と適切な管理
<http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/index.html>

と飼い主との間でのトラブルとなることが多い。

以下に、猫に関連する問題を列挙した。

猫が原因となるトラブル

<猫自体が原因となるもの>

- ・庭への侵入、車等の損傷(花壇の踏み荒らし、車の傷など)
- ・糞などによる匂い
- ・鳴き声による騒音
- ・交通事故の誘発
- ・軒下等での出産

<人間が関係するもの>

- ・置き餌などによる不衛生な環境
- ・多頭飼いに伴う騒音、匂い

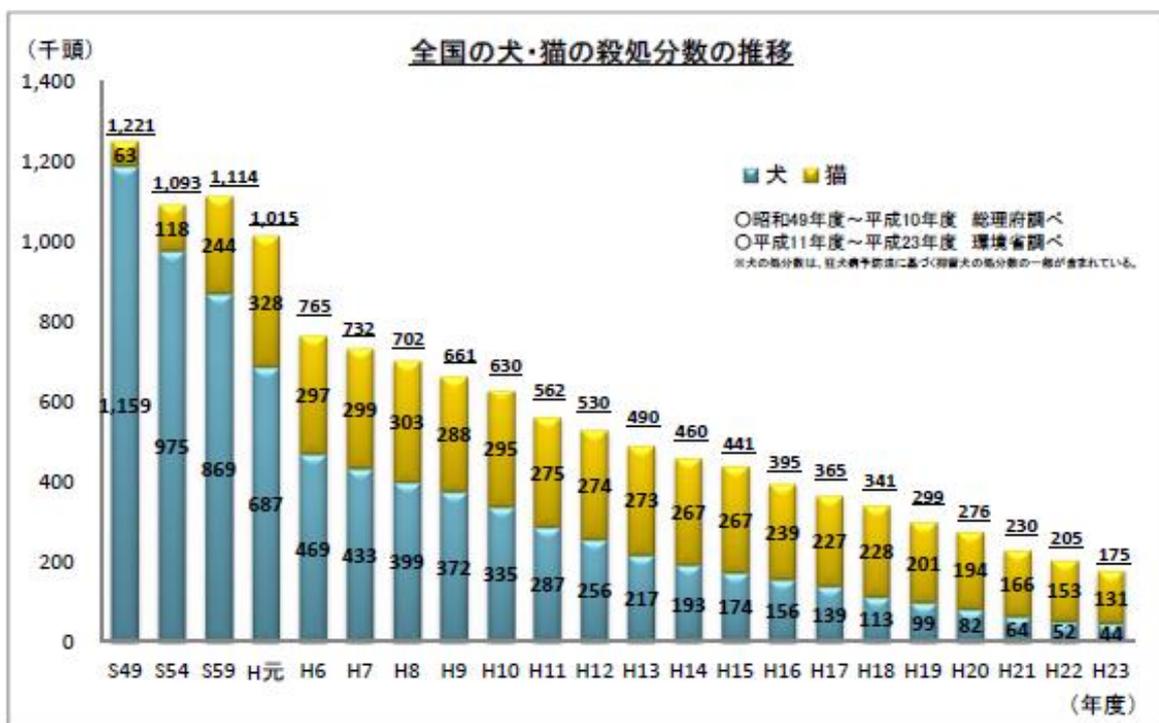
こうした問題は多くが住宅街で見られる。環境省は平成 22 年に「住宅密集地における犬猫の適正飼養ガイドライン」において、飼い主の心構えや住宅密集地における飼育の注意点を呼びかけている。行政による取り組みも行われており、置き餌をしないようにするなどのマナー向上の呼びかけ、指導などのほか、飼養に関する条例を定める自治体もある。条例の多くは動物愛護的な内容を含めて飼い主の責務について記しており、猫の特性上、屋外で活動する可能性のある場合にはみだりに繁殖しないよう対策することを明記しているものも多い。しかし(固有の生態系を守るためとして飼い猫の登録を義務化した例³はあるものの、)一般に飼い猫の登録は行われていなかった。その中で新潟市では 2013 年 8 月に 10 匹以上の犬猫を飼う場合に届け出義務を条例により課した⁴。県にも同様の条例があるものの、一度に 50 匹以上の猫の引き取りを求められるなど対応しきれない事態が生じたため、「飼い主のモラルが動物の暮らしと安全を守る」という発想の元、この条例が制定されたという。多頭飼いは飼い主がペットを管理しきれない事態が起きやすく、問題の発生・拡大の可能性が高まる。多頭飼いの登録は広がりを見せる可能性があるだろう。

³ 沖縄県竹富町、東京都小笠原

⁴ 朝日新聞「犬猫 10 匹以上は届け出 新潟市義務化条例案」2013 年 2 月 26 日

動物愛護意識が広がる中で殺処分を減らす取り組みもまた広がっている。環境省のとりまとめによれば、犬猫の殺処分数はともに年々減少している。しかし犬に比べ、猫の引き取り数・処分数は著しく多く平成 23 年度においては犬の 3 倍以上である。猫の引き取りおよび処分の特徴を見てみよう。まず、猫の引き取りは離乳年齢に達しない幼齢の個体が多い。したがって猫が出産をしたものの、親猫の飼い主が飼うことができなかつたり、野良猫が産んだ猫の引き取り手が見つからなかつたりして引き取りを依頼される子猫が多いことがわかる。動物愛護センター等に収容された後の譲渡数で見ると、引き取り数の約 8.6%が新しい飼い主によって引き取られている。そして、平成 23 年度の場合には 131,136 匹が殺処分された。

インターネット上には多数の里親募集サイトがあり、そこで譲渡されるものも多いことを考えれば、人間の管理下でない、いわば「露頭に迷う」猫はこうしたデータ上の数をさらに上回っているはずだ。



出典：環境省，「犬・猫の引取り及び負傷動物の収容状況」

http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html

犬・猫の引取り

	引取り数			
	飼い主から		所有者不明	
	成熟個体	幼齢の個体	成熟個体	幼齢の個体
犬	13,944	2,806	44,494	10,398
猫	13,214	19,099	25,278	80,154
合計	27,158	21,905	69,772	90,552

処分数					
返還数	返還数のうち 幼齢個体	譲渡数	譲渡数のうち 幼齢個体	殺処分数	殺処分数のうち 幼齢個体
16,166	96	17,093	5,552	38,396	6,857
297	61	14,483	11,329	123,445	73,880
16,463	157	31,576	16,881	161,841	80,737

出典：環境省，「犬・猫の引取り及び負傷動物の収容状況」

http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html

こうした猫を減らす取り組みは現在、広く行われている。収容数を減らす数値目標を掲げ、終生飼養や野良猫への餌やりをやめる旨、ペットに名札をつけるなどの啓発活動、引き取り基準を厳しくするなどの取り組みが行われている。ただし野良猫は移動するため、管理しきることは難しく取り組みの効果が見えにくい。例として、東京都荒川区は2008年に餌の放置等に罰金を科す条例を制定した。不妊手術の情勢もあわせて行った結果、2012年度には路上等で死ぬ猫、殺処分さ

れる猫がともに半減した。⁵

殺処分の対象となるような猫を減らす取り組みとして、従来は住民の意識向上や飼い猫の不妊手術の助成が中心であった。その中で地域全体による猫への働きかけとして注目が集まっているのが「地域猫活動」である。先述の環境省によるガイドラインの定義によれば「地域住民の認知と合意を得られている、特定の飼い主がいない猫」を地域猫と呼ぶ。これは1999年、横浜市磯子区の「猫の飼育ガイドライン」で初めて使用された言葉であり、適切な飼育・管理の下、一代限りの生を全うさせることを目的としている。TNR活動(Trap, Neuter, Releaseの略。野良猫を捕まえて避妊手術を行い、元いた場所に返すという活動)を発展させたものであり、餌やりや排泄物の掃除などの世話を地域のルールの下で行うことまでも含む。野良猫の問題を地域の環境問題ととらえ、猫の好きな人、そうでない人など地域全体での解決を目指す活動であり、当時の磯子区では獣医師や職員を交えた住民のシンポジウムが3度開かれ、ルール作りが進められた。現在、地域猫活動を支援する自治体が増えてきている。地域猫という名称を用いない地域でも、飼い主のいない猫にも不妊手術の助成を行うなどの取り組みが行われている。

「地域猫」は全面的に歓迎されている訳ではない。繁殖や給餌、排せつの管理をされたからといって猫嫌いの人の庭に入るのを猫がやめるということはおそろくないだろうし、餌を求めて近隣から野良猫が集まってきてしまうことも十分考えられる。また、本当にすべての住民の合意を得られるようなルール作りはまず不可能であるし、話し合いや認知が不十分で「なぜ餌をやっているのか」といった苦情が従来以上に増えることもある。

地域猫活動にしても先述の条例等と同じく、何らかの効果が出るまでには長い時間のかかることであるため、今後の展望を注視したい。

1.3 猫と触れ合いたい人々

ここまでペットとして、問題の種としての猫を見てきた。こうした問題がありな

⁵ 読売新聞「野良猫対策効果じわり 荒川区条例化5年」2013年11月26日

がらも、猫は人気のある動物であるようだ。

日本人と猫の関わりの始まりは奈良時代だといわれている。仏教の伝来とあわせて船に乗せられてきたのが始まりだという。平安時代には貴族たちが愛玩目的で猫を輸入して飼うのが流行し、繋いだり室内に留めたりして飼ったそうである。その後、繁殖力旺盛な猫は鎌倉・室町時代に増え始め、一般の人々にも飼われるようになっていった。

現代に目を戻して、近年よく聞くようになった言葉として「猫カフェ」がある。猫と同じ空間に座り、触れ合ったり遊んだりできる喫茶店であり、台湾の店舗が始まりといわれている。国内では2004年に大阪にできたのが最初とされているようだ。ただ、それ以前にも看板猫が人気を集める店はあったと思われる。猫カフェの情報サイト「猫茶.com」には東京都内だけでも26店舗が登録されており、また、全国に目を向けると2013年3月時点で166店舗が確認されている。猫を飼っている愛猫家はもちろんのこと、ペットを飼えない環境にある人々が足を運び、猫と触れ合う機会を猫カフェは提供しているといえるだろう。

また、猫の話題性はこれに留まらない。テレビ番組による紹介をきっかけに「猫の島」として知られるようになった宮城県石巻市の田代島は東日本大震災の後、「猫の島」支援を掲げる支援金を全国から募った。1口1万円で半額を島で養殖がおこなわれている牡蠣や猫グッズでお返しを行い、半額を猫の餌代や島の設備の復旧にあてるとしたところ、3か月で1億5千万円を集めたという。猫が多いとされる「猫の島」は田代島に留まらず、岡山県の真鍋島、愛媛県の青島、福岡県の藍島などを挙げることができる。こうした島の多くは島民よりも猫の方が多い、などと言われるほどだ。その理由については、漁業を生業とする地域では船に住み着くネズミをとる猫が重宝されたこと、大漁の神として大切にされてきたこと(例として田代島には猫神社がある)、往来が激しくないために交通事故に遭うことが少なく繁殖しやすいことなどがあげられている。こうした理由から、猫の多い町は港町や(路地が多く車の少ない)下町が多い。先述したような島や、長崎、神奈川県の江の島、東京の下町である谷中、そして本論で取り扱う広島県の尾道などが猫の多い町として、愛猫家を中心に人気である。

また、猫と写真という観点もある。動物写真家の岩合光明氏は猫の写真集を多数発表していることで著名である。その写真は町の中での猫を撮影したものが多く、猫の生き生きとした、あるいは自然な表情が人気である。氏の写真展は「ねこ歩き」が2013～2014年にかけて全国の百貨店を巡回中であるほか、2013年には東京都写真美術館で「ネコライオン」を開催した。また、NHK BSプレミアムで「岩合光昭の世界ネコ歩き」が放映中であるなど人気の高さがうかがえる。そのほか、2011年には女優の北川景子が猫とともにカメラを持って尾道市を訪ねるテレビCMも放映されたり、猫を撮るための指南本が出版されたりするなど、デジタル一眼レフカメラの広まりと共に猫を写真に撮りたいという人も増えつつあるようだ。

日本人と猫との関係は長いが、猫カフェの発展や猫が多いということが話題になってきたのは近年である。「猫が多い」という要素が人々にとってそこに足を運ぶ動機となるのならば、猫に出会えるということは町にとって重要な価値を持つといえるのではないだろうか。この点についてより深めるため、次章では問題意識および論点を述べる。

第2章 問題意識

2.1 猫に価値はあるか

以下、本論文では人間の完全な管理下でない猫を議論の中心としていく。人間の完全な管理下に「ある」猫とは、完全に室内飼いで飼い主以外と接することのない猫である。この飼育形態では他人との関わりをほぼ全く持たず、元々大きな問題とはされないためである。したがって、飼い主がいても屋外へ出て他人との関わりを持つ可能性のある猫については議論に含めることとした。

第1章では、現代日本の猫を取り巻く問題について見た。前章で挙げた状況から見ると、猫の印象は二面存在する。すなわち、周辺環境を悪化させたり近所トラ

ブルを誘発したりする「迷惑な存在」とのんびりと過ごす、かわいらしい姿で人々を「癒す存在」である。この相反する二つの印象は、愛猫家と猫の嫌いな人などをはじめとして各人によって強弱が異なることだろう。これに関連して地域猫活動の発案者である黒澤泰氏は、人々が猫に対して持つ感情について、元々猫を好きな人が2割、嫌いな人が2割、残りは無関心であると地域猫活動を通しての所感を述べている。この中でも、無関心な人々は庭を荒らされるなどの被害を受けると猫の嫌いな人々へ変わっていく可能性が高いとも言い添えている。ただ、たとえ猫の好きな人であっても、自分の庭が荒らされることに対しては悪感情を抱くといえるため、好悪によって猫に対する寛容の度合いが違う、とした方が正確であろう。

猫に被害を受け、地域から猫がいなくなってしまうという人はたしかにいる。しかし即時的に猫を地域から消してしまう方法という、里親の見つからない猫が多くいる現状を鑑みれば保健所につれていく、ということになるだろう。そうなれば多くは殺処分を避けられない。こうした現状の詳細については前章で見た。特別に動物愛護的な人でなくても、これらの統計に対して心を痛み、殺処分は避けたいと考える。これは猫が害獣になりうる反面、罪なき命として認識されているためであろう。これは猫による害が農業被害や命に係わる危険など極めて深刻なものではないことに加えて、人間との距離が近く、「かわいらしい」「癒される」動物であるためでもあると私は考えている。

こうした現状を踏まえ、私は猫が迷惑と命の尊さのみの間で天秤にかけられることに疑問を感じてきた。そこで私は猫の持つ要素としてのかわいらしき、すなわち「人間に与える癒し」を評価することができないかと考え、これを本論の出発点と定めた。

その上でまず、猫を特別に好きな人以外にとっても猫から癒しを得ることができるのか、という点について心理学的面から検証する。詳細は次項にて述べる。

2.2 猫が人間に与える癒し

動物が人間に与える癒しという観点から、本項ではアニマルセラピーに関する資

料にあたった。

しかしながらアニマルセラピーを支援する中心的組織であるアメリカ、ワシントンのデルタ協会においてはアニマルセラピーという言葉は認めておらず、そういった活動は「動物介在療法(Animal Assisted Therapy)」及び「動物介在活動(Animal Assisted Activity)」という言葉が用いられている。前者が医師の下で患者の治療を目的として行われるものであるのに対して、後者は医師との連携を持たない活動である。これらの定義を紹介した上で、本論で扱うものについては「動物介在活動」に分類されるものであることを明確にしておく。

また、福祉やリハビリテーションといった場面で取り上げられることの多いアニマルセラピーであるが、林良博氏が言及しているように「孤立した生活を送っている人々や親子関係、夫婦関係にひずみが生じている人たち、(中略)災害など突発的な出来事によるショック」なども動物が身近にいることで回復のスピードが速まっているとされる。同氏はこれについて、アニマルセラピーは病んでいる人々だけを対象としないという点で、一般の医療と決定的に異なるとしている。

こういった点から、治療を目的としない一般の人々が猫に触れることの効能について、アニマルセラピーの視点をを用いることとした。

先述したように、議論の対象となる猫は主に外で暮らす猫である。この猫に対して、町に存在する人間は「餌やりなどの世話をして飼い主として接する人間」と「世話はしないが接する機会のある人間」に別れる。したがって、前者の得る猫を飼う効能と、後者の得る訪問型のアニマルセラピーに近い効能について述べる。

一般に、動物を飼うことの効果は「社会的効果」「生理的・心理的効果」「心理的効果」に分類される。社会的効果とは、動物と共にいることが周囲に与える印象であり、犬を連れていた結果として周囲の人々と良好な関係を築くことができた、といった事例がある。生理的・心理的効果は、ペットと暮らす人々がそうでない人々に比べて長生きする傾向にあることに代表される。また、リハビリとしての散歩も犬を伴った方が患者の取り組みを向上させることもよく知られている。心理的効果は科学的な実証が難しいが、動物と共に過ごすことによる安心感、不安

や孤独感の減少等である。また、教育の面からも継続的な動物の飼育が、とりわけ子供に対して動物や生命を尊重する心を育む機会を与える。

一方、動物との関係が断続的・一時的である場合について見る。このケースでは施設訪問型のアニマルセラピーを事例に見てみたいと思う。こうした活動は動物を飼う施設の少ない日本では広く行われており、日本動物病院福祉協会 HP では1986年から2013年までの活動実績として14,626回の訪問回数を確認することができる。対象は老人ホームや心身障害者施設、児童福祉施設、病院等である。継続的に動物と接することの難しいこの形では、動物との触れ合いを通してというよりは動物を窓口ボランティアスタッフとの交流がスムーズに行われたという検証の方が多い。動物を介することで、人間同士のコミュニケーションに良い影響を与えることができるという例である。また、毎週の訪問を楽しみにする人、犬との触れ合いを通して精神的な落ち着きを得た人など精神の安定も多くみられるようである。

しかしながら忘れてはいけない点としては、人間の福祉の場においても動物の福祉が軽視されてはいけないということである。たとえば猫の中には飼い猫であっても、飼い主にしか懐かない猫、過度の触れ合いを嫌う猫も多い。動物は個々に適性の有無を判断されたうえでアニマルセラピーに参加しなくてはならない。その点において、地域社会に暮らす猫は完全な飼い猫に比べると適正があるといえると林良博氏は指摘している。地域猫活動の下でなくとも、屋外にいる猫を世話している人は一人ではないことが多い。たとえばある一匹の猫について、朝はこの家で餌をもらい、昼間は別の場所で寝ていて、などと暮らしている猫もよくいる。各所で違う名前をつけられてかわいがられていることも多い。そうした性質から、屋外で暮らす猫は色々な人間と接することに慣れやすい。屋外は危険が多い分警戒心の強い猫も多いが、人間と触れ合うことに適性を持つ猫を見つけることは屋内で暮らす猫に比べれば容易であろう。

2.3 分析対象・広島県尾道市

前項においては猫から得られる癒しについて見た。本論では町で暮らす猫の価値を論じるため、猫の多い町として有名な広島県尾道市を取り上げ、「猫のいる町」という環境が周囲にどのような影響を与えるかについて見ていく。猫に関わる人々というと地域住民や行政がメインと考えられることが多いが、ここでは多くの主体への影響や癒しという視点について評価するため、町を訪れる観光客を含めることとした。観光客は限られた時間のみを尾道市で過ごす中、その中で町の中の猫と関わる。旅の中での猫との出会いがその人の癒しとなる可能性があるためである。そのため、比較対象としても癒しが主たる目的となる旅行の目的地を選んだ。温泉地や避暑地、近年はパワースポットと呼ばれることも多い神社仏閣、ローカル線を用いた旅である。これらについて、「観光客の得る癒し」「地域との関係」「持続性」の3つの観点を軸として見ていく。

これについては個別に後述する。

まずは、「猫のいる町」のモデルケースとしての尾道市について紹介する。

尾道市は広島県東部に位置する。瀬戸内海に面した港町で、因島、向島をはじめとする島を含んでいる。また、南北約 35km にわたる細長い地形は、尾道市街地や田園が広がる北部地域としまなみ海道沿線の島々で構成された南部地域の大きく 2 つに分けることができる。気候は温暖で降雨量の少ない瀬戸内型に属するが、内陸部は温度差の大きい山間部の特徴を示す地域である。

歴史的にみると、古くから港町として栄えた町である。12 世紀には年貢米の積出港として栄え始め、江戸時代には北海道と大阪を結ぶ大型船「北前船」の寄港も始まった。そうした繁栄から尾道には豪商が現れ、寺の建立や町の整備に投資を行い、その街並みは今でも残っている。とりわけ市北部の山手地区は別荘地だった面影を強く残す。そうした美しい街並みは尾道にとって観光の顔といえる。大林宣彦監督の映画作品(尾道三部作と呼ばれる「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」)のロケ地としても著名である。現在でも坂や古寺の多いこの町には車両が入れないほど狭いエリアもあり、観光客は必然的に徒歩中心の観光をすることになる。市街地から千光寺までの道のりの中には古民家を活用した喫茶店やギャラリーがいくつも見られ、歩く人々を楽しませている。そして、こうした狭い路地のような風景に溶け込んでいるのが猫たちだ。私が尾道市を訪問したのは 8

月であり、昼間のうちは猫をほとんど見かけなかったが、夕方に再訪したところ道路に寝そべる姿を多く見つけることができた。人に慣れているようで、階段に眠るところをまたいでも知らん顔といった様子の猫が多く見受けられた。以下に筆者撮影の訪問時の写真を示した。単に風景を写すよりも猫を含む方が町の雰囲気や雄弁に伝えてはいないだろうか。

こうした本物の猫との出会いのほか、「猫の細道」と呼ばれる猫の足跡のついた坂道や招き猫美術館、町のあちこちに置かれた「福石猫」、猫にまつわるお土産の品など、猫は町を彩っている。



・尾道市の位置 出典：尾道市公式ホームページ

http://www.city.onomichi.hiroshima.jp/www/normal_top.htm

・尾道市街地：筆者撮影、2013年8月

2013年8月の訪問時、尾道市観光課の小田様よりお話を伺った。ここでは環境政策課で伺った猫に関するお話も交え、町の様子や猫に関する内容について述べていく。

港町としての歴史がある尾道にはかつて、海運業や問屋を構える商人が多く存在した。経済や産業の中心地として賑わった港町ということで、猫が増えたのではないかとのことである。また、市の南部の島々にも猫はいるが、「猫の多い町」として話題になるのは専ら北部の山手地区であり、古い街並みの中の猫という要素が大きいと感じるようだ。そうした街並みの道は狭く、車両の入れない地区もある。実際に猫が多かったりその点において尾道が紹介されたりすることはもちろん認知の上ではあるものの、猫に関する苦情も寄せられるために推進等はせず、行政としては静観の姿勢をとっているようだ。つまり、現在旅行誌等の紙面で猫の写真を添えて町が紹介されるといった盛り上がりは、民間によるものである。猫に関しての苦情は「野良猫に餌をやっている」「糞などの悪臭がする」などが寄せられるという。そうした苦情は4月から8月までで20件ほど寄せられたといい、必要であれば指導を行っているようだ。現に私の訪問時にも、午後に指導に向かうとのことだった。そのほかの対策として、毎月の広報で飼い猫は屋内で飼う、無闇に餌をやらないなどマナーの周知に努めている。全国的に野良犬・猫は減っていると思われるが、市ではあまり数が変わらないという印象を受けるようだ。したがって、現状では餌をやっている猫は自分の猫であるという意識を持たせるなど、町内の意識改革を行っていきたいとのことであった。

ここまで尾道市について概観してきた。市では猫が溶け込むような古き良き街並みを持ちながらも、住民からは苦情が寄せられている。この町が猫に価値を感じるためには、何が必要なのだろうか。単に「猫がいる、多い町」から「猫に癒される町」とコンセプトを広げるため、旅行者が癒しを感じる要素とその地域について比較を行う。

第3章 癒しを目的とした旅行

尾道の美しい街並みとその中で暮らす猫に癒される旅行とはどのような特色を持つのだろうか。本章では他の「癒しを目的とする旅行」との比較を通して明らかにしていきたい。

元来、余暇としての旅行は日常から離れて過ごす場という意味で人々に癒しを与えている。その目的は観光やスポーツなど様々に分けられるが、今回は「日頃の疲れをとりたい」「リフレッシュしたい」など、癒しを目的とするものに対象を限ることとした。取り上げた内容は、温泉地・避暑地、神社仏閣、ローカル線である。主な着眼点は「観光客の得る癒し」「地域との関係」「持続性」の3つとした。

以下で扱う「癒し」について言葉の普及の流れと共に明確化しておく。

従来、「癒す」は「傷ついた心身の回復をする」という意味で使われてきた。これに「心を和ませるような」という現代においてよく使われる意味合いが加わったのは2000年代であると松井剛氏は指摘している。1999年、「新語・流行語大賞」のトップテンの一つとして「癒し」が選ばれたことを皮切りに、「癒し系」のキャラクターやクラシック、コンピレーションアルバムをはじめとした音楽、エステなどをセットにしたホテルプランの売り出しなどあらゆるジャンルで商品と共に私たちの中に新しい「癒し」という言葉の意味が浸透してきた。自然派の化粧品や生活用品、マイナスイオンを売りにした家電、懐かしさを前面に出した商品なども含め、「癒し」はあらゆる形で私たちを取り囲み、現在に至っているといえるだろう。

こういった流れを受け、「癒しを目的とする旅行」とは「心を和ませるような経験を求めての旅行」とも言い換えられるものであることを明記しておく。その上で、具体例について見ていく。

3.1 温泉地

・概要

湯治は日本において伝統的な癒しの旅行である。湯治という言葉の通り、これは本来の意味での癒しだととらえられる。古くは8世紀奈良時代の「出雲国風土記」に玉造温泉に関する記述が見られるなど、温泉は古くから親しまれてきた癒しの形態である。江戸時代には温泉の名所に湯治に訪れることが全国的に盛んになるなど、旅行としての面も古くからもっている。

環境省の調査⁶によれば、現在の国内の源泉は約 27,000 か所、宿泊施設をともなう温泉地は約 3,000 か所に上る。全国に分布しており、観光地として著名なところも箱根、熱海、別府などを代表に枚挙に暇がない。また、「国民保養温泉地」が温泉の効能が顕著で湯量が豊富であることや景観が優れていること、気候学的に休養地に適していることなどを条件に環境省に指定・支援されている。国民保養温泉地への宿泊人数は減少傾向にはあるが、未だ年間約 900 万人に利用されている。

・癒し

温泉による癒しにおいて特徴的な点は、医学的な効能であろう。昨今話題になる「癒し」が精神的なものを中心としているのに対すると、この特徴は際立つ。しかし、温泉に行きたいと考えて目的地を選ぶ際に泉質の違いや効能についてまで調べる旅行者は多くない。また、日帰りや1泊2日の滞在では温泉の医学的な効果は得られにくいといえる。したがって、大きな浴槽やひなびた旅館の空気といった温泉宿での滞在、周囲の高原や海岸、森林などの自然環境、賑やかな、または静かで趣のある温泉街の風景などを総合した結果が、人々に癒しをもたらしているという方が正確である。

⁶ 環境省,「環境統計 温泉の保護と利用」

<http://www.env.go.jp/doc/toukei/contents/#onnsennohogotoriyou>

・地域との関係

温泉地の多くがその観光の性質から宿泊施設を伴い、温泉街を形成してきた。観光客向けの宿泊施設、土産物屋、料理屋、またそれを支える問屋や従業員の住む住居など、温泉地は地域と一体となって癒しを提供する場である。温泉が当該地域の産業の中心的役割を果たし、また地域のトレードマークとして扱われてきたために地域との結びつきは強いと考えられる。

・持続性

この観点からはまず現在に至るまで温泉地が人気のある観光地であり続けたことを評価すべきであろう。湯治が目的の時代から大衆観光、慰安旅行的な色を帯びた時代へと移り、そして現代は癒しが求められる時代となった。こうした時代の流れに温泉地は対応してきたのである。また、歴史があるということは表面的な問題への対処や法整備が一通り行われてきたということでもある。この観光地としての地盤は将来的にも強みといえるであろう。

3.2 避暑地

・概要

避暑もまた日本人にとって伝統的な癒しの旅行といえる。日本を代表する避暑地として、本項では軽井沢を中心に事例を見ていく。

長野県軽井沢は浅間山南麓の標高約 1000 メートルの高冷地に位置している。月別の平均気温は東京に比べると 6～8 度低く、そのパターンは札幌の月別平均気温と類似しているとされるため、避暑地としての気候的な特性に優れていることがわかる。また、落葉広葉樹林の多様な植生と木の実類の豊富さが様々な動物や鳥、昆虫の棲息を可能とし、そうした豊かな自然も観光資源の一つとなっている。歴史的にみると軽井沢は近世における中山道の宿場町の一つとして栄えた。明治期になると、日本の高温多湿な気候に苦しんだ外国人が軽井沢に目をつけ、避暑地としての歴史が始まったといえる。外国人の別荘が増加するにつれて、秘書生活のための店舗、スポーツ施設、宿泊施設が充実していった。その後、日本人の

富裕層による別荘所有が中心となり高級別荘地としてのイメージが形成された。このイメージは現在に至るまで軽井沢という地名のブランド化を助けている。地方自治研究機構による調査⁷から現在の旅行者を見ると、来訪季節はやはり夏が半数を超え、その後は春、秋と続く。目的で見ると「自然・景観」「アウトレット」「街の散策」「宿泊施設でのんびりする」の4つがそれぞれ3割以上を占めている(複数回答)。現在においては避暑の役割に加え、軽井沢という町そのものを楽しむという人々も増えてきているようだ。

・癒し

夏に避暑という目的で訪れる場合には、気候条件の下に文字通り酷暑から逃れて体を休めることができる。また、自然の豊かさから春から秋の3シーズンは森林浴的な効果も得られる。清浄な空気や目に鮮やかな緑、または紅葉などが心を和ませることが考えられるだろう。そうした環境の中でテニスやサイクリングなどのスポーツを楽しめるという点も軽井沢の強みである。それらの原因として、「避暑地」というブランドの下に町作りが進められてきたために自然的景観が守られてきたことがあげられる。

・地域との関係

「高級別荘地」「避暑地」のイメージに沿った町作りが進められてきた。軽井沢町の景観条例は建築規制を含み、景観・自然保護に努めている。こうしたブランドイメージは現在に至るまで顕在であり、本来の軽井沢町以外の近隣地域でも「軽井沢」の名前を冠した施設等が多くみられる。夏期の人口は常住人口の10倍にもなる地域だが、常住人口も増加傾向にあり、2014年時点では19,965人となった。しかし先に触れた訪問の目的でもあったように、アウトレット等の商業施設の充実に伴って「癒し」を求める以外の旅行者も増えてきている。これらの人々は日帰りで軽井沢を訪れる場合も多く、人々の訪問目的の中心が将来的に変わっていくことも考えられる。

⁷ 軽井沢町,地方自治研究機構(2012)「軽井沢町観光振興研究」
http://www.rilg.or.jp/004/h23/h23_03_02.pdf

・持続性

温泉地と同じく、まずこれまで持続的に町作りが行われてきたこと、ブランドイメージを守ってきたことが評価されるべきである。「癒し」を感じられるような緑あふれる自然環境も重要な要素の一つであるために、景観とあわせて保護されてきた。長年の努力の結果として、日本人の間での「避暑地＝軽井沢」のイメージが作られたといえるだろう。

しかし東京都心からの便の良さ、商業施設の充実により日帰り客の増加も見られ、避暑・癒しを目的としない人々の割合が将来的に増加していくことも考えられる。それにともなって従来の「日頃の疲れを癒すために滞在する地」から「都心からほど近く、気軽にリフレッシュできる場所」にイメージが変わることも考えられるだろう。

3.3 神社仏閣

・概要

神社仏閣とは、神社と寺の総称である。2013年には伊勢神宮と出雲大社が遷宮を行ったことで参拝客が増加したほか、近年では「パワースポット」という言葉とともに注目が集まっている。

文化庁の宗教統計調査⁸によれば平成24年度における国内の神社は81,389社、寺院は77,394件にのぼるといふ。全国各所に存在し、文化財等に指定されているもの、観光地として有名なもの、地元で親しまれているものなど、その規模や知名度は様々である。旅との関連でいえば巡礼が代表的である。世界的にはメッカの巡礼などを思い浮かべるが、日本でいえば四国八十八か所の札所を巡る四国遍路、またその巡礼者を指す「お遍路さん」という言葉で馴染み深い。修行や悲願成就のために行われてきた歴史のある四国遍路であるが、徐々に観光化していき現在では目的も「自分探し」「癒し」などのワードが散見されるようになってき

⁸ 文化庁、「宗教統計調査」

<http://www.bunka.go.jp/shukyouhoujin/toukei/>

た。

また、「パワースポット」という言葉が癒しブームに伴って注目されたことも神社仏閣への人々の視点を変えたといえる。「パワースポット」に明確な定義はないが、とらえ方は従来の自然信仰に近く「その場にいることで大地から力を得られたり、リラックスできたりする」ことが重要な要素とみられる。そのため、鎮守の森を持つ自然豊かな神社仏閣などの靈験を得ようとする人々が増えているようだ。しかしながら、信仰の伴わない話題性のみの参拝が批判される向きもあり、神仏への畏敬の念とそれに伴うマナーは当然求められている。

神社仏閣への旅というと、各地の文化財等として有名な神社の見学といった観光色の強い旅行も存在するが、ここでは「癒し」を主眼とする場合について述べる。

・癒し

この場合の癒しは専ら精神的なものであるといえる。まず山中や鎮守の森を持つ場合には森林浴をはじめとする、自然の中に身をおくことでのリラックス効果があげられる。また、自然信仰の色が強いが、ご神木や祀られている巨石を見ることによって厳かさを感じることで、また自分と向き合うなど内省的な効果を得る人も多い。信仰を持つ場合には本来の巡礼に準ずる旅となるため、自身の信仰心を高めることにもなるといえる。

・地域との関係

神社仏閣には成り立ちをはじめとしたいわれや歴史があり、古い町であればあるほど地域との関係が深い。また神仏を祀っているという本来の役割から、粗雑に扱われるというケースはほとんどないといえる。しかし観光地化され拝観料等の収入を持つ寺社を除くと、従来、墓地を通して長い関係のあった檀家・氏子の転出によって収入が減少していく事態は避けられないことが多い。一方、新しく転入してきた世帯がその地域の寺社との関係を持つことも少ないといわれる。そういった面からみると寺社と地域との関係は希薄になっていくという流れは避けられないものであろう。

また、パワースポットとされる寺社は山中にある場合も多く、そういった場合には地域との関係を濃く持つものはまれといえる。

・持続性

現在の「癒し」「パワースポット」といった流れがあくまで流行であるとするれば参拝客の増加を見込むことは難しい。また、地域との関係が希薄になることは維持管理の困難を意味する。寺の将来性について中島隆信氏はいくつかの可能性を示している。葬式関連のビジネスに特化する「サービス業者としての道」や「仏教の布教活動への道」である。前者は葬儀社が一括して行われることが増えた葬儀サービスの役割を寺、神社等が明朗会計の下で復権するということである。後者は現代、ストレスに苦しむ人々が遍路巡りや座禅などに取り組む姿が見られることを受けてそうした人々に新たな自分探しの場を提供するものとして、寺の存続の可能性があると氏はしている。

3.4 ローカル線

・概要

大辞泉によればローカル線とは「鉄道など交通機関の、幹線から分かれた地方支線。特定の地域を走る路線」のことである。したがって路線バス等を指すこともあるが、ここでは鉄道に限って論ずる。その上で近年、ローカル線に関する話題は大きく二つである。従来からある「廃止論争」とローカル線の旅ブームである。それぞれについて述べる。

ローカル線は地域住民の日常の足である反面、利用者が減り運行の採算が取れないことが多い。この議論は1968年に国鉄諮問機関が提出した意見書による「指名を終えた」とされる路線「赤字83線」が指定されたことに始まった。選定基準は「営業キロが100キロメートル以下で、鉄道網全体から見た機能が低く、沿線人口が少ない」「定期客の片道輸送量が3000人以内、貨物の1日発着600t以内」「輸送量の伸びが競合輸送機関を下回り、旅客・貨物ともに減少している」の3点であった。指定された83線について地元との協議が行われる手はずとなったものの、反対運動が立ち上がり実際に廃止されたのは1972年まででは15路線

に留まった。この間にもローカル線建設は続行され、結局は差し引きゼロとなった。しかしながらその後、多くの路線がバスへの転換等を伴って廃止されてきた。現在も残る路線もほとんどが廃止を議論された歴史を持つとされている。乗り入れ客の減少は、沿線人口の減少のほか住民の自動車利用がきわめて一般化してきたことが原因と考えられる。廃止賛成論としては「乗客のいない鉄道に費用をかけて存続させる必要はない」という点が主張される。廃止反対論としては「住民の足として機能している」とする場合や「歴史ある駅や車両は守る価値がある」とする場合などがある。

一方で「ローカル線の旅」を楽しむ人々も増えてきている。

JR 東日本が「ローカル線の旅」特集ページ⁹を web 上に作りローカル線利用に適した切符を販売するほか、青春 18 きっぷを用いた旅のモデルケース等を紹介した書籍なども散見される。いずれもキーワードは「大人の旅」「ノスタルジック」などであり、本来は移動手段である鉄道をゆっくり楽しむゆとりの旅を提案している。ローカル線の中には観光列車として蒸気機関車やトロッコ列車などを走らせる路線もあるが、従来通りの車両である場合も多く、「鉄道での時間、車窓を楽しむ」色が濃いことを示している。

・旅行者の得る癒し

癒しブームと共に隆盛した「ノスタルジー」「懐かしさ」が好まれるという流れにあるといえる。こうした動きは東京都青梅市で昭和レトロをキーワードに続いている「青梅宿アートフェスティバル」や、映画作品「ALWAYS 三丁目の夕日」のヒットなどに見られる。本来こうした時代を「懐かしい」と感じられる世代の人々だけでなくそれよりも下の世代にも「古き良き時代」というイメージへの憧れが広くあるといえるだろう。

ローカル線では山中や海岸、鉄橋、豪雪地帯など美しい車窓を堪能できることも大きい。わざわざ地方路線に「乗車しに行く」理由はここにあると思われる。ま

⁹ JR 東日本「ローカル線の旅」
<http://www.jreast.co.jp/localline/index.html>

た、ローカル線を案内する記事等が利用方法や車窓だけでなく、沿線の情報についても紹介することから、「ゆとりのある旅」自体が癒しを与えるものであると考えられるだろう。

・地域との関係

観光列車化に成功し、旅行者を得られる地域とそうでない地域に二分されるといえる。しかしながらどちらの場合にもその地域での運行の歴史、利用者が減少しつつあるものの地域の足として、そして故郷の風景として、ローカル線は地元から愛されているとあって良い。また、ローカル線が観光列車化に成功し、存続していく場合には走行地域を盛り上げる役割を果たすことができる。

3.5 小括

ここまで、癒しを目的とする旅について見てきた。それぞれの特徴をまとめていく。

温泉地	
癒し	身体的効能、温泉・宿・温泉街等の総合的な雰囲気
地域との関係	温泉街の形成、地域のトレードマーク
持続性	現在までの持続的発展、連続的な支持

避暑地	
癒し	避暑、自然環境、景観
地域との関係	ブランドイメージの形成
持続性	現在までの持続的発展、将来的な目的の変化の可能性

神社仏閣	
癒し	精神的な癒し(自然信仰的、内省的)
地域との関係	関係の希薄化、人里が遠い場合にはまれ
持続性	「パワースポットブーム」であれば望めない

ローカル線	
癒し	自然環境、懐かしさ、ゆったりした時間
地域との関係	運行の歴史、利用者の減少、故郷の風景
持続性	利用者の有無に左右される可能性

第4章 「猫のいる町」への旅行

4.1 3つの要素からの評価

前章では比較対象とした4つの旅について「旅行者の得る癒し」「地域との関係」「持続性」の3つの視点から評価してきた。ここでは「猫のいる町」尾道への旅行について、同様の視点から見ていく。

・概要

尾道市の概要については詳しく上述したため、ここでは観光のポイントとなる要素についてのみ述べる。また、猫と街並みという取り合わせについて論ずるため、市北部の市街地に限って述べることとする。

市街地の魅力は初めて訪問するにも関わらず感じるような「懐かしさ」である。尾道市内の古寺は20を超えるほか、昔ながらの町並みは今も映画ロケ地を巡る人々がいることでわかる通りに顕在であり、それを彩る存在として猫が存在する。実際の猫だけでなく、芸術家である園山春二氏による福石猫や招き猫美術館、猫の細道と呼ばれる細い坂道、古民家を改修した喫茶店など猫を連想させる風景が

いたるところで見られるといえる。

・旅行者の得る癒し

旅行者は尾道市街を歩くことで、ノスタルジックな美しい街並みや風光明媚な風景に触れる。狭い路地のような道は人々の生活の場でもあり、極度に観光地化された地域では味わえない懐かしさを覚えるだろう。また、猫に特有の癒しはまさに「生きている」ことであるといえる。町の中で自由に生活をする猫を眺めたり、触れたりすることで、(アニマルセラピー的な)生き物ならではの温かみを感じることができる。猫が暮らしているという要素は町の懐かしさ、雰囲気をもより高めることになるだろう。

しかしながら猫は人によって好き嫌いのある動物であること、人畜共通感染症の危険も否定できないことなど、配慮が必要である。

・地域との関係

街を訪れる人に癒しを与えることができるのは、ある程度人間との関わりを持った猫だといえる。餌やりをはじめとして、世話をする人間がいなくては猫は存在し得ないためである。また町の景観を守るため、無尽蔵に猫が増えないよう管理(不妊・去勢手術)されなくてはならない。「猫のいる町」作りのため、そうした管理を実際に行うのは他地域の地域猫活動を見るに地域住民の有志である。また、世話をされている猫であっても猫の被害が完全に収まるかというところではない。しかしながらそうした負担の一方で、たとえば不妊手術をされない猫たちが出産をしたり雄同士が激しい喧嘩をしたりするといったことは管理の下では減るといえる。また将来的には猫の数を減らすことも可能であり、数の減少は被害減少に直結するといえるだろう。

・持続性

この場合に維持しなくてはならないのは「街並み」「猫」の二つである。街並みに関しては、尾道市においては長く現在の状態が保たれてきたといえる。古民家を中心に空き家も増加しているが、再利用への取り組みも積極的に行われ、

シェアハウス、ゲストハウス等への転換が行われてきた¹⁰。寺も檀家を持ち、地域との関係を保っている。

猫に関しては現在、問題が多く住民の意識改革を進めたい考えであることは先に述べた。この点については課題であるといえる。

3つの視点から見た尾道市をとりまくポイントとしては以下のようなになる。

- ・生き物である猫から受ける癒しであること
- ・(特に猫の管理を行うにあたっては)地域住民の協力が不可欠であること
- ・ベースとなる街並みの保存がなされてきたこと

次項において、要素の一般化をすすめ尾道のもつアドバンテージの詳細化と課題の発見を試みる。

4.2 一般化

ここまで「猫のいる町」から得る癒しとして「猫」と「尾道」という取り合わせでの議論を進めてきた。これを一般化し、「稀少性のない動物」と「町並みの美しい町」という視点から見直すこととする。

- ・稀少性のない動物

動物の名の上がる観光といえば、天然記念物の棲息地や個性豊かな生態系が見られる地域、動物園などが多い。その中で、稀少性のない動物、つまり自分の暮らす町や近隣地域でも見られる可能性のある動物を求めて出かけていくということについて考えてみる。

¹⁰ NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト

<http://www.onomichisaisei.com/index.php>

「稀少性がない」「町で見られる」という条件の下では、猫のほかに鳥類や虫があげられる。私は、中でも鳩が猫と性質的に近いのではないかと考えている。移動が自由であること、衛生的問題が取り上げられること、そして公園や神社などの風景に溶け込み、人々をリラックスさせることなどがその理由である。猫と違う点は、「鳩の糞害に悩んでいる」旨の話題に触れることはできても、「鳩がいて人気である」旨の記事は見当たらないという点であろう。ペットとして鳥類と猫とでは人気に差があることから、猫を好む人と鳥を好む人の数には差があると思われる、その関連もあって鳩は人気や知名度の面から猫に劣る。また、毎日餌をやる人であっても鳩を撫でるなどのスキンシップをとれることは、猫に比べると珍しいことであるという点も特徴として挙げられる。動物特有の温かみに触れることは動物から得る癒しにおいて大きいことは先に見た通りである。

また、蝶も公園等の花壇で目にすれば「自然が豊か」「色鮮やかである」などの印象を与えることが考えられるが、稀少性のない種であれば同様の観点から猫には劣ると考えられる。スキンシップにおいても同様である。

こうした比較から、「町の中で動物を目にしたり触れ合ったりする」ことを求めて人が集まるためには、話題性や集客に関わると考えられる「人気の度合い」や「スキンシップの取り方」が求められると考えられる。この2点を満たす動物としては当然、犬があげられるが「町の中で」という条件から見ると、狂犬病予防や怪我の防止が万全でなくなる可能性があり、実質不可能であると考えられる。したがって、条件として「安全性」も考慮されるべきである。そして住民に動物が許容されるためにはある程度、動物を管理できることが望ましい。たとえば鳥類は個体の識別が難しく、生活拠点をおさえたりおよその数を把握したりすることも難しい。それと比較すると猫は地域猫活動に例を見るような「管理の可能性」があるといえるだろう。

また、「町で見られる」とはいつでも従来以上に増えた結果として周囲の生態系に影響を与えることは十分考えられる。とりわけ猫については実際の事例についても後述した。「周囲の生態系への影響」という面では、猫は分が悪いといえるだろう。

・街並みの美しい町

ここでは鳩や猫をはじめとする一般的な動物が馴染む、人間の生活する空間としての町を取り上げる。つまり、「山の中の鹿」や「湿原の中の鶴」のような日常から離れた空間ではなく、「路地裏の猫」や「境内の鳩」のような風景について論じる。

本論で取り上げた尾道市街のような、その町を歩くこと自体が観光になりうる街並みは全国に散見される。例としては岡山県・倉敷美観地区や京都の町家の並ぶ街並みなどが有名である。その魅力として、建造物自体の外観の美しさのほか、その町の長い歴史を感じさせること、もしくは故郷ではないがどこか懐かしい「昭和レトロ」的な味わいを持つことが多く取り上げられる。つまり人々が町歩きに魅力を感じる要素として、「その町の持つ歴史」があると考えられる。そして当然のことながら、それには人々が歴史を感じとることのできるような町が保たれていることが前提となってくる。したがって「保全」も重要な要素といえるだろう。以上の二つは主に建造物を守るための条件であるが、ここでの論点として町に動物がいるという状況を許容するための条件についても論じることとする。

まず動物の面からみると、ある場所で生活するためには餌、隠れ場所が必要であり、また天敵が極端に多くないことが重要であることが考えられる。天敵に関しては町の中でも、鳩が猫に襲われたり、蝶が鳥類に捕食されたりすることは当然ありうるため、淘汰されてしまう可能性がある。ただ、その動物が無尽蔵に増えることを天敵が防ぐとも考えられ、局所的な調整が行われる可能性もあるだろう。逆にその動物が新たに天敵となって周囲へ影響を与える可能性についても考えられ、これは動物の項で危惧した通りである。また、動物園のように場所を限って飼うのでないために、巣や隠れ場所を作るのに適した場所が存在することが望ましいだろう。この点については動物が大型になるにつれて難しくなると考えられる。虫類であれば害虫でない限り、巣に関して問題になることはないが、鳩やツバメが軒下に巣を作る、猫が倉庫に住み着く、などは問題視されることが多いためである。したがって動物の面からみると、町の条件として「天敵の有無」「住処が許容される場所」が求められる。

次に人間の面からみると、論点はその動物を受容できるかという点にかかってくる。一定以上の大きさの動物であると、自分の敷地内に動物が住み着くことは通常許容されない。したがって、最低条件は「自分の町でその動物を見かけること」

を大多数の住民が許容できるかという点である。この点は単純な好悪のほか、その動物によって住民に何らかの被害もしくは利益が存在することで許容の度合いは異なってくるはずである。つまり逆説的ではあるが、大多数の住民に許容されるために、協力者によって動物による被害を減らす取り組みがされることが望ましい。地域猫活動を例にとれば、餌やりは決まった時間に公園等で行い、餌の残りやあらかじめ作ってあるトイレの掃除等を行うといったことである。こうすることで、「隣家が餌を置いたままにするために不衛生であるし、自分の敷地内にも猫が侵入する」といった類の被害は減少すると考えられるためである。この管理の難易度が動物の種類によって異なることは、動物の項で述べた通りであるが、人間の面からみれば実際に世話をを行う「協力者」の存在が不可欠である。動物の生活拠点を把握する、決まった時間に世話をするなどの条件から、住民がこの役割を担うことが適切であろうと思われる。

「動物のいる美しい町」を実現するための条件をまとめると、町に関しては「町の歴史」「保全」、動物に関しては「天敵の有無」「住処が許容される場所」、人間に関しては「町を歩く動物の許容」「協力者の存在」となる。

ここに挙げた点から尾道市を見直してみる。その歴史と今も街並みが残っているという点は、概要において見たようにクリアしているといえる。また、現在猫が町で見られるということは特筆すべき天敵が存在してこなかったこと、住処があるということを示している。人間に関する条件については「町を歩いている状態」は許容されているものの、苦情が寄せられる事態も存在するため、協力者を募り、猫に対して体系立った方策がとられる必要があるといえる。

4.3 問題点

ここまで、猫のいる風景から得られる癒しに関して論じてきた。最後に、研究の限界点として考えられる問題点を挙げることにする。

- ・管理の難しさ

これは猫の行動の性質によるものである。移動が自由であること、隠れている個体が多いことに加えて、(犬と異なり)登録の義務がないことから、正確な頭数は把握されていないことがほとんどである。都市環境の確保の面からみれば、頭数管理のための不妊手術や予防接種は重要であり、これらの施術は町が猫を受け入れるための最低条件となるべきと考えられる。

解決策として、不妊手術を施した猫には耳にピアスや切れ目をつけるなどして印をつけていく方法が知られる。つまり、そうした目印をもとに施術の済んでいない猫を丹念に探すことが求められる。

・人畜共通感染症のおそれ

これは主にペットの飼い主への注意喚起の文脈で目にする問題である。文字通り、ペットからの感染のおそれのある病気であり、ひっかき傷や排泄物、唾液等の感染経路が認められている。したがって、主に日常的に世話をする人間を中心に注意が必要と考えられる。

ただし、清潔を心がけること、濃厚な接触を避けること等で感染を防ぐことは可能であるため、知識の周知が解決策となる。

・固有生態系の破壊のおそれ

これは猫の習性による問題である。猫は習性として、小型哺乳類や鳥類、虫等を捕食する動物である。そのため、それらの動物の天敵となり個体数を減らしてしまうことがある。

例を見れば、北海道・天売島や東京・小笠原諸島の海鳥、奄美大島のアマミノクロウサギなどが被害にあってきた。また、ヤマネコの類においては捕食被害に遭う小動物の減少が餌の減少となるケースのほか、野良猫・飼い猫からの感染症も存在するとみられている。実際に対馬で1997年、猫免疫不全ウイルス感染症と猫伝染性腹膜炎に感染したツシマヤマネコが確認された。

こうした地域では飼い猫の登録、マイクロチップ埋め込みの義務化、野良猫の不妊手術、島外への移動などが行われており、猫の頭数を減らしたり固有生態系との接触を防いだりといった方策がとられている。

・猫を嫌う人々

これは猫の行動範囲に関わる問題である。

多少の差や傾向はあれども、おそらくすべての動物に関して、それを好む人と嫌う人が存在すると考えられる。しかし、多くの場合には動物園や保護区の中でのみ動物が生活するために問題にならない。また、希少な動物の場合にはその生態的価値が客観的に認められるため、人間に近い場所を生活の場所とすることがあっても、一定の理解を得やすい。しかし、いずれの場合にも該当しない。人間の生活圏と猫の生活圏は本論では同じであり、また稀少性も認められない。そのために、猫が嫌いな人々は不快な思いをすることがあるだろう。

個人の好悪を変化させることはできないと考えられるため、最低限、物理的な被害(猫に端を発する不潔な環境など)を取り除くことが求められる。これはまた、本項の始めに戻ることであるが、管理に関する内容であろう。

第5章 結論

ここまで、「猫のいる町」に価値はあるか、というテーマの下で議論を進めてきた。以下、議論を振り返り結論を述べる。

まず現代日本の猫を取り巻く現状について概観し、猫が邪魔者扱いされる反面、猫に癒されたいという人々もいるという点について確認した。

次に「邪魔者ではあるが、尊い命である」といった意見に対する疑問を問題提起とし、猫から得られる癒しに注目することとした。特に問題になりやすい町に住む猫に焦点を当てるため、「猫が多い」と有名である、つまり猫を目当てに旅をする人の存在する広島県尾道市を取り上げた。尾道市においては地域住民の中から

は猫への苦情が生まれ、旅行者は猫を見て心を和ませる人も存在するという状態である。そして「猫から得られる癒し」にはどんな特徴があるのかについて明確にするため、温泉地、避暑地、神社仏閣、ローカル線の4つの癒しを目的とした旅行形態を取り上げ、それらを構成する要素について「旅行者が得る癒し」「地域との関係」「持続性」の3つの視点から特徴を抜き出した。

比較の結果、尾道を「猫のいる町」としてとらえた場合の特徴を再掲すると

- ・生き物である猫から受ける癒しであること
- ・(特に猫の管理を行うにあたっては)地域住民の協力が不可欠であること
- ・ベースとなる街並みの保存がなされてきたこと

であるといえる。

ほかにはない癒しであるという価値の下、「猫による被害」と「労力をかけて猫を管理すること」が比較されることに正当性が生まれるのではないかと考えられる。そうであれば単に、猫も罪なき命だからと議論されるよりも猫に価値が生まれたといえるだろう。

本来はより詳細に「不妊手術」「餌やりと清掃」「頭数の管理」などどこまでを行うことでより良い町を作ることができるかをはじめ、「問題点」であげた未解決の問題についてこの先議論すべきと思われるが、本論では以上の結論をひとまずの限界点とする。

しかしながら「猫から被害を受けたので駆除する」でも、「駆除はかわいそうだから地域で飼おう」でもなく、「猫がいることで価値が生まれる」という可能性を示した点において、本研究に意義があると考えている。

参考文献

- ・野口哲司(2010)「尾道における猫事情」『地域健康文化学論輯』vol.2
 - ・土田あさみ(2012)「行政による地域猫活動の支援状況およびその効果について」『東京農大農学集報』57巻2号
 - ・環境省(2010)「住宅密集地における犬猫の適正飼養ガイドライン」
 - ・黒澤泰(2005)『地域猫のすすめ—ノラ猫と上手につきあう方法』文芸社
 - ・菊池俊夫(2008)『観光を学ぶ—楽しむことからはじまる観光学』二宮書店
 - ・白坂蕃ほか(2009)『暮らしと観光—地域からの視座—』立教大学観光研究所
 - ・富田昭次(2003)『ホテルと日本近代』青弓社
 - ・林良博(1999)『検証アニマルセラピー』講談社
 - ・川添敏弘(2009)『アニマル・セラピー』駿河台出版社
 - ・武田尚子(2010)『温泉リゾート・スタディーズ』青弓社
 - ・鳥塚亮(2013)『ローカル線で地域を元気にする方法 いすみ鉄道公募社長の昭和流ビジネス論』晶文社
 - ・櫻井寛(2008)「櫻井寛が行くローカル列車の旅」『日経おとなの OFF』特別編集、日経 BP 社
 - ・岡田謙二(2011)『日本のパワースポット案内 巨石巡礼 50』秀和システム
 - ・日本温泉協会(2006)『温泉 自然と文化』日本温泉協会
 - ・日本温泉協会(2007)『温泉 歴史と未来』日本温泉協会
 - ・中島隆信(2005)『お寺の経済学』東洋経済新報社
 - ・福井義高(2012)『鉄道は生き残れるか「鉄道復権」の幻想』中央経済社
 - ・松井剛(2013)『ことばとマーケティング「癒し」ブームの消費社会史』中央経済
- ・尾道市, 尾道市公式ホームページ
http://www.city.onomichi.hiroshima.jp/www/normal_top.html
- ・尾道観光協会, おのなび
<http://www.ononavi.jp/index.html>
- ・ペットフード協会, 全国犬猫飼育実態調査

<http://www.petfood.or.jp/data/index.html>

- ・環境省自然環境局，動物の愛護と適切な管理

<http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/index.html>

- ・田代島にゃんこ共和国，田代島にゃんこ・ザ・プロジェクト

<http://nyanpro.com/>

- ・文化庁，宗教統計調査

<http://www.bunka.go.jp/shukyouhoujin/toukei/>

あとがき

私は猫と共に育ってきた、と言っても過言ではない。現在は自宅で4匹の猫と共に暮らしているが、それぞれ「公園で拾った猫」「家に通ってきていた雌猫の息子」「庭で餌をやっていた猫」「怪我をして庭に来た猫」であり、元は野良猫である。私の自宅の周りでは昔に比べて野良猫が減った。しかしいなくはならない。なぜだろうか、と思ったのがこのテーマのきっかけである。「地域猫活動」を知って、建設的な意見だと感じたけれども、猫を単に「罪なき命」であるから生かす、というのは私の感覚からはずれているように感じた。お金を払って猫カフェに行く人や、私のようにカメラをもって尾道を訪れる人がいるのならば、猫がいることに価値をおいても良い。もっと言えば「猫のかわいさにもっと価値を認めてほしい」と思ったのである。

エピグラフで引用した作家のヘミングウェイは愛猫家であったといわれる。知人から譲り受けた多指症で六本指の猫を「幸運を呼ぶ猫」と愛し、大切にしようとした。どんな文脈の発言かはわからなかったが、彼の猫に関する言葉にこんなものがあった。

「一匹の猫から次へと広がる」

一匹の猫を大切に思って接することは、自分で思うよりも多くの影響を与えると私は考えている。また、多くの人にそう考えてもらえればと思う。

最後になりましたが、「好きなことをやりなさい」と温かくご指導くださいました大沼先生に深く感謝申し上げます。